
 地区協議会より

おすすめの一冊 北海道地区協議会

「超思考」

北海道中央調理技術専門学校

副校長 齊藤 邦則

「バラ色の夢を語っても意味はない、人の世を生き抜く最低限の力をつけろ。」

本書は料理本ではなく、北野武氏のエッセイである。しかし読み進んでいくにつれ、実には的確に、ユーモアを交えながら、今を生きる世代への進言が散りばめられていることに気づく。

最も離職率の高いと言われる「飲料サービス業界」において、ドロップアウトせずに済む子が1人でも増えればいいと考えているのは、どこの教育現場でも同じだろう。社会で働いたことのない学生に少しでも多くの覚悟を付けさせることが必要で、理想と現実とは往々にして乖離していることはしっかりと教えておくべきである。

本書に、こう書いてある。「昔も今も変わらないことがある。苦勞をしなければ、仕事にやりがいなんて見つけられるわけがないのだ。仕事の本当の面白さとか、やりがいというものは、何年も辛抱して続けて、ようやく見つかるかどうかというものだろう。(中略) 苦しさとか悔しさがあったから、仕事が上手くいった時の喜びもあったのだ。それを仕事のやりがいと言ったのだ。」

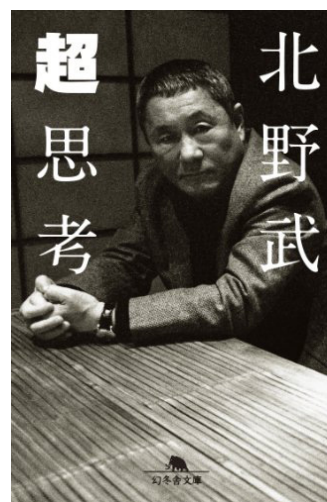
まさにそうである。やりたいことだけやって食っていける時代などあるわけではなく、「本当の自分」とか「夢は必ず叶う」等のポジティブワードほど、うさんくさいものはない。

夢を語る前に社会人として働く下地を作ること。一生懸命やればなんとかなるほど世の中は甘くないこと。必死にやってもどうにもならないこともあり、それが当たり前だっことを教えるのも教育で、本当に伝えなければならぬことでもある。

《本音という作り話》の項に、「エンゼルフィッシュは横から見れば立派だが、上から見たらただの棒じゃね〜か。」とある。物事も水槽と同じようにいろんな角度から見る事ができれば、多面的に物事を考えることができる。華やかな料理の裏には厳しい下積みがあり、厳しい下積みの中にも歓楽や発見がある。現実と向き合った上で、少しでもそう考える事ができれば、新たな仕事の面白みを見つけたり、壁を一つ乗り越える事ができるかもしれない。

シニカルな表現が多い本ではあるが、思考を止めないこと、自分の考えを持つことなど、気付かされる部分も多い。自分の職業に置き換えることでいろいろな解釈ができるが、要は「どんな職業でも礼儀をわきまえて地道に働くことがいかに大変で大切なか」ということだろう。

古臭く感じるか新しく見えるのかは読み手次第だが、世代も関係なくお薦めしたい一冊である。



「超思考」

幻冬舎文庫、2013年8月

著者：北野武

239ページ、495円＋税